

思

想

6

前

線

そこに^の対^しもなく、自制を込めた淡々たる筆致で明晰に描かれているのは、スーダンのパリ、それに、エチオピアのアニユワと呼ばれるふたつの民族集団が蒙った、最近の20年ほどの社会変容である。現地の喪失とその記録の出版との先陣争い——それだけなら近年この国の若い研究者によって次々と出版される、優れたフィールド・ワークのひとつに過ぎまい。外への知的関心を摩滅させ、自閉した「情報過剰」に飽和した日本で、大衆にはなじみもない少数社会集団を取り上げたモノグラフィーなど、「ミリオン・セラー」とは無縁な営みである。

だがそこに描かれたのは、もはや「通常」の民族誌とは言い難い。「内戦」とともにかつてのフィールドは今や殺戮と破壊の現場となり、著者が滞在した村むらの幾つかは焼き払われ、親交あった若者も解放戦線に参加し、村人の多数が死亡する。「非常事態」が日常と化したとき、所詮「よそ者」たる人類学者にいかなる営みが可能だというのだろうか。飢餓と貧困と悲惨という紋切り型の情報を、他人事として一過的に消費する国際報道の姿勢を批判し、性急な正義感や奇麗事の人道主義では割り切れぬ現実を醒めた目で分析し、「敵・味方」や「正



連載⑦
友人たちの村は戦場となった
立ち会うということの倫理
(ト) (ニ)

(印) 2/2/15

Nr 2306

17/8/96

三重大学 フランス文学
稲賀繁美
inaga shigemitsu

義・悪」の区別がもはや成り立たぬ現場の利害対立や憎悪の悪循環を静かな憤怒とともに見極め、演劇仕立てもお涙頂戴も峻拒しつつ事態を綴ってゆく。

「多少は危険な目にあ」った(どころではない)その体験は、安全な故国をもつ自己と、紛争の現場に生命の危険に晒されつつ踏み止まらざるをえぬ——実名を出すことも憚られる——人々との差異に送り返される。難民と化し家族も離散した無名の声に耳傾けるうち、読者は今は亡き友の鎮魂へと導かれる。『立ち会う』

本書を学問的に評価する資格など当方にはもとよりない。だが、学術論文といった寸法に還元して本書を評価することこそ、的外れな学会ボケだろう。ひとりの研究者が半生を賭けてどうひとつの世界と切り結んできたのか。安直な理論構築を拒絶する現場との交わりに、アカデミズムがその外側と取り持つべき倫理の発生を告げる、生な手触りが模索されている。

*栗本英世『民族紛争を生きる人びと』(世界思想社1996)。

Eisei Kurimoto,
"Coping with Enemies:
Graded Age System
among the Pavi of South-
eastern Sudan" 『国立
民族博物館研究報告』vol.
20, No.2. 1995

思想